PISA 後のドイツにおける教育改革の動向

――ザクセン州 68. Oberschule 訪問記――

渡　邉　眞依子

去る2014年９月、久田敏彦教授（大阪青山大学）らとともに、ドイツ東部ザクセン州において、ドイツの教育改革に関する調査を行った。ドイツではいわゆる「PISA ショック」以降、学力向上のためのさまざまな教育改革が国家主導的に進められている。その中で、各州や各学校では、具体的にどのような取り組みが行われているのかを明らかにすることがこの調査の目的であった。本稿では、調査の一端として、ライプツィヒ市内の 68. Oberschule で参観した授業の様子や校長先生へのインタビューによって得た情報を報告する。

１．学校について

68. Oberschule は、ライプツィヒ市内で比較的大規模の前期中等教育段階の学校である。第５学年から第10学年まで、合計18クラスで構成されている。旧東ドイツのザクセン州では、伝統的な三分岐型学校制度ではなく、基幹学校と実科学校の両方の修了資格を取得することができる「多様な教育課程をもつ学校」とギムナジウムの二分岐型学校制度となっている。2013/14年度より、それまで Mittelschule と呼ばれていた「多様な教育課程をもつ学校」が Oberschule に変わり、より個別の支援や進路の流動性、進学・就職への接続能力を高めることが目指されている。

68. Oberschule は、市内の Oberschule では唯一のインクルーシブ教育の実験校である。ドイツでは2009年に障害者権利条約を批准したことから、各州でインクルーシブ教育のための教育改革が進められている。68. Oberschule は指定を受け、2013/14年度からインクルーシブ教育のプロジェクトを行っている。プロジェクトは、第５学年の１クラス男女15名と Lindenhofschule（知的障害の促進学校（Förderschule））の１クラス女子９名が提携し、隣り合った教室で授業を受け、一部の授業や遠足などを一緒に行うことから始められた。この24名の生徒たちは、現在６A という一つのクラスで、午前中一緒に授業を受け、様々な行事も一緒に行っている。校長によると、このクラスに在籍する15名のいわゆる健常児たちは、本人およびその両親が、インクルーシブ・クラスに入ることを希望した生徒である。教師も、自ら希望してこのクラスを担当している。授業は、Oberschule の教師と促進学校の教師が、PUH（教育学的授業補助）の教育者の援助を得ながら協力して進める。このクラスに在籍する促進学校の子どもたちは、基本的にはすべての科目の授業を Oberschule の子どもたちと一緒に受ける。教師たちは個々の子どもの状況を考慮しながら、授業の内容や進め方などを相談し、共同的に授業の計画、実行、評価を行っている。促進学校の子どもたちは、授業の途中に別室で個別指導を受けることもある。どの子どもがどの授業を別室で受けるかについては、障害や苦手なことに応じて教師が決定する。このインクルーシブ教育の取り組みによって、障害を持った子どもたちが他の子どもたちと同様に教育を受け、自分の能力を発揮することができるだけでなく、Oberschule の子どもたちにとっても、障害のことや他者を助けることを学び、社会的コンピテンシーを獲得することができる。一年前までは「障害者は怖い」と言っていた

子どもも、生活を共にする中で、一緒に遊ぶことができるようになってきたという。

2．参観した授業について

インクルーシブ･クラス 6 A のドイツ語の授業を参観した。教室には 2 つずつ並べた机が 3 列、前向きに置かれていた。座席は男女混合で、促進学校の子どもたちも一か所に固まることなく、他の子どもたちの間に混ざって座る。授業のはじめは Oberschule の教師（T1）が教室の前に立ち、促進学校の教師や補助の教育者（T2、T3）は教室後方に座っていた。

授業の内容と流れは、おおよそ表 1 の通りである。数名がよそ見をしていたが、どの子どもたちも静かに教師の話を聞き、すすんで発言していた。特に盛り上がったのは、最後のクイズの場面であった。クラスに残った促進学校の生徒も、積極的に挙手する姿が見られた。一方、別室の授業では、教師の話し方が非常に穏やかで、 3 人の反応に合わせたゆったりとした進め方であった。板書は手書きの簡単な単語（アクセント、眼鏡など）だけであった。 3 人の理解度に合わせて、他の子どもたちとは異なる学習課題が設定されているようだった。

表 1　授業の流れ

教師の働きかけ		子どもの活動
	（子どもたちに 1 ～ 5 が書かれた札を配布する。）	
T1	本の一部を朗読する。	教師の朗読を黙って聞いている。
T2 T3	朗読を聞くポイント（テンポ、発音、アクセントなど）を示し、得点の付け方を説明する。	得点の付け方を理解する。
T1	T2 に渡された本の一部を朗読する。	教師の朗読を聞く。
T2	（教室の前に立ち）得点のカテゴリーとそれぞれ何点であったか尋ねる。	得点のカテゴリーを答え、 1 ～ 5 の札を挙げ得点をつける。
T1	黒板に貼った「DKSDSL」のカードの意味を予想させる。	数名が挙手して予想を答える
T1	今日のテーマを伝える。 「このクラスはすばらしい読み手を探す（Die Klasse sucht die Superleser）」（板書）	今日のテーマを理解する。
T3	促進学校の生徒 3 名を連れて別室に移動し、指導する。	3 名は別室で個別指導を受ける。 他の生徒の一部も席を移動する。
T1	（板書「よい朗読の秘訣」） よい朗読のポイントを発表させ、出てきた答えのカード（文章で書かれたもの）を黒板に貼る。朗読の例を示しながら考えさせる。	挙手して朗読のポイントを発表する。
T2	促進学校の生徒一人の脇に座り、発言などをフォローする。	
T1	ワークシートを配布し、「よい朗読の秘訣」を各自まとめさせる。	ワークシートに記入する。（健常児クラスは文章で記入。別室クラスは課題に下線を引いただけの様子。）
		別室の 3 名が戻ってくる。
T2	教室の前に立ち、まとめのクイズを行う。	1 列ごとに、早い者順で答える。 別室授業を受けた生徒1人が黒板の前に立ち、ポイントのついた列を黒板に記録する。

写真 1　全体での授業の様子

写真 2　別室での授業の様子

3．教育改革の意義と課題

今回訪問した 68. Oberschule では、障害を持つ子どもも全教科を健常の子どもと一緒に学ぶことができるという点が興味深かった。この学校では障害児も他の子どもと同様の教育が受けられるという原則と、一人一人に応じた教育が徹底されているように感じた。インクルーシブ教育は学力向上政策とは異なる改革の流れではあるが、個別の支援という点では共通しており、ザクセン州の特徴の一つと考えられる。さらに、教師たちの共同も印象的であった。授業における役割分担など、事前に共同的な授業づくりが行われている成果が見られた。教師が共同的に問題に取り組む姿勢は学ぶべき点であるといえよう。一方で、子どもどうしの共同という点では物足りなさを感じた。子どもたちが実際に朗読してポイントを見つけるなど、共同的に課題を解決する場面はなく、授業の前半で教師から提示された知識を応用してまとめたり、採点するだけであった。ドイツでは学力向上政策の一つとして、生徒が獲得すべき知識や能力の目標を明確化させた「コンピテンシー志向の授業」が展開されている。この授業もよい朗読のポイントを理解するという目標が、教師からの知識の伝達によって達成されたコンピテンシー志向の授業といえる。こうしたコンピテンシー志向の授業や今日のインクルーシブ教育には、多様な者との学び合いによって、より認識が深まる授業づくりという発想はないように感じた。他州の取り組みも調査し、教育改革の課題を引き続き検討していきたい。

附記　本報告は、平成26～28年度科学研究費補助金基盤研究 (B)（海外学術調査）「PISA 後のドイツにおける学力向上政策と教育方法改革」（研究代表者：久田敏彦、課題番号26301037）による研究成果の一部である。